

釧路湿原自然再生協議会
第12回再生普及小委員会
議事要旨

平成21年2月6日開催

■ 再生普及行動計画ワーキンググループの経過報告と今後の活動について

ワンダグリンダ・プロジェクトについて今年度の進捗状況及び新年度の募集概要、知名度アンケートの結果、フィールドワークショップについて事務局より説明があり、さらに今後の活動予定の説明が行われ、その後意見交換が行われた。

委員

- 再生協議会に参加している方々を対象としたフィールドワークショップで案内人を務めた。対象ではない方から、「あれに我々は参加できないのか」という問い合わせが開催後にあった。地元市民の方たちは、今回の様に湿原の中に実際に行って湿原がどんな状態か、再生事業をやっているというけど、再生事業をしなければならぬほど湿原が具体的に病んでいるのか、というところを実際に見てみたいという様な希望があるのだと感じた。
- もしも、参加者の対象を広げようとする場合、対応可能な人数としては、1つのグループは20人未満位が意思の疎通はいいと思う。また、案内人が複数いることで回数や場所、機会などを増やすことは可能であると考え。さらに、当小委員会やワーキンググループのメンバーの中にも各方面の専門家の方がいらっしゃるので、それぞれの方々がそれぞれの立場で、案内人として参加していただくとさらに機会が増えるだろう。

委員

- 知名度アンケートの結果の報告を聞いて感じたが、再生協議会自体が知られていなくても、湿原自体が認識されて人々の関心が深まっていれば、それはそれでいいのかもしれない。しかし、せっかくこういう組織を作って一生懸命やっている中で、自然再生協議会の認知度が下がっているという現状を受けて、知名度を上げていくという努力が、具体的な行動である必要があると考える。今後の具体的な方法として、何か案があれば知りたい。

事務局

- 今年度から新たに始めた取り組みも、より湿原についてもっと知ってもらいたい、より興味を持っていただきたいということで始めているフィールドワークショップであるとか、サポーターの方の募集など、様々な場での広報の周知などで活動してきている。しかし、知名度そのものはまだ上がってなくて、別の新たなものというのはこれから検討していく必要があると考えている。

委員長

- 例えば放送とか新聞とかに自分達が露出して行ってというのも、その時には一挙に知名度は少し上がるけれども、時間がたつとやはり忘れられてしまうという流行現象になってしまう

ことも多い。それよりは一步一步地道に、一つ一つ積み上げて行って、その結果、何十年かたったら地域の人たちの認識が高くなる、となるのが本当ではないか。活動を進める上で5年ごとに見直しが入るけれども、もしかすると5年では足りない様な長いスパンで少しずつ考えていくほうが本来的なのかなと思う。少しずつ、あせらずに、というのが大事ではないか。

委員

- 学生たちなどから、今なぜ再生事業が必要なのか、再生事業はどうなっているのか、という質問を受けることがある。以前はマスコミなどから再生事業をこの様に進めてますよということが随分アピールされ、広く市民に情報が届いていた。しかし、マスコミなどの情報発信がひと段落した今、もう終わったのかなと思っているところがあると思う。一方で、釧路湿原が本当に再生事業が必要な状態なのかどうかということを知りたいという人々もいる。
- 今5年目というターニングポイントなので、釧路湿原はどうなっているのか、病んでいるのか、どうなのか、再生事業がどうして必要なのかということを改めて紹介したり、知らせるという、いわば再生協議会打って出る機会、そういう段階に来たのではないかと思う。

委員長

- 以前から釧路湿原の縮小、劣化、乾燥化など色んな形で釧路湿原に様々な危機が忍び寄っているという報道が随分なされて、市民の人たちの中にも知識として伝わっている。専門家もまたそれぞれの専門分野で研究したり観察したりしている次元では、大きな危機感をそれぞれが持っており、その危機感を何とか広めたいとか、克服するための運動体なり、活動を何か作って行きたいという風に思っていると思う。
- 私たち小委員会の再生普及は、それを分かりやすく確実に、地域に住んでいる方達の目と耳に届けるという役割を担っている。その届け方が足りないと、どんなに優れた活動や企画があっても、結果的に専門家や一部の人たちだけがやっている仕事という風に思われてしまう。世間に広く確実に伝えるということが我々の役割の中でも一番大切なことかなと考える。

委員

- 私どもの団体としては、検討はしてはいるがまだワンダグリンダには登録していない。格別な理由があつてということではないが、もろ手を挙げて活動の第一にという所まではまだ行っていない。我々がやっている活動と地域の方達とのつながりをどう作っていくかが出来ていないところ。

■ 環境教育ワーキンググループの経過報告及び今後の活動について

環境教育事例集の完成報告と活用方針について報告が行われ、環境教育ワーキンググループの今後の活動について事務局より説明が行われ、委員による意見交換が行われた。

委員長

- 今回完成した事例集は、学校教育における環境教育に関するアンケートを行い、その結果を

環境教育の実践の事例集の形で、報告書として作成した。これまでは、環境教育に関するテキストなども作って配布しても、棚の奥にしまわれちゃうのがオチで、学校の中で一体どこに消えたのか、配布された記憶さえないという学校も多かった。今回は、実際に現場で参考になるような形にしたいと言う事で、本の装丁から、表題から工夫して作成した。表題のコンセプトは、いわゆる釧路湿原に対しての認識を深めるというだけではなくて、一歩進んで、気づいて、分かって、更に湿原に対して守るという行動まで子ども達に、理解してもらうということを目的として、この「きづく わかる まもる 釧路湿原」という表題になった。

- 完成後のこれからの課題としては、配布されたこのガイドブックをどのように有効に活用したらよいかという、いわば本当に大事な問題について検討を進めることである。